

槐 かい

平成28年2月号

岡井省二創刊



大義

高橋将夫

真つ黒な雲真白な雪降らす
人において冬木には無き殺気かな
神の留守ドミノ途中で倒れだす
賽銭と手袋投げてしまひけり



遺伝子を一つ間違へ鮫鱈に
王朝の屏風の裏のすだまかな
道長は冬三日月を見る気なし
雨音に包まれてゐる室の花
払ふべき煤心中になかりけり
最後まで針とぎすます冬の蜂
蟻螂は枯れても大義振りかざす



槐安集

水野恒彦

わが思惟の片隅いつも螻蛄鳴くよ
胞衣塚といふ奈落に立ちて冷ましや
蓮の実の飛び尽したる虚空かな
麝香草しばらく嗅いで真昼とす
満月に身の空洞を照らさるる

加藤みき

秋の薔薇ライオン橋を渡りたる
秋霖やクリームパンの旨き店
冬木の芽ありやなしやの風の中
龍の玉の特大ひとつ土近し
冬籠りとてもとてもと出歩けり

中島陽華

昼月の近江舞子の赤とんぼ
コスモスにいささか強し余呉の風
背に心経柿の実熟れてをりにけり
四畳半なりに散らかり秋のくれ
腰といふ弱きものあり冬の虫

竹内悦子

先客は雀なりけり初しぐれ
千両や蚕の社傘さして
蛇塚に転んでみたり秋の天
九十九折紅葉山且つ紅葉山
十月の雪舞ふ地熱発電所



雨村敏子

花野から戻つてきたる顔をして
霜降の畑踏む音の溶けてゆく
いまがよい時吾亦紅がいつぱい
南天のたわわに垂るる鬼門かな
太秦の雨となりけり亥の子餅

本多俊子

蔓引けば詩ひそみぬる蝦かずら
紅さやか遺跡の丘の水引草
象の眼のかなしみ深し黄落期
山茶花に朝の祈りの声とどく
火の匂ひ冬の匂ひや雑木道

近藤喜子

冬ざれや穴を掘りたる日の記憶
日輪より現れし鷹あれはゼウス
万物の音を抜きとり蓮枯るる
不可解の一塊となる海鼠かな
星の神話かたり継ぐやう榎火燃ゆ

瀬川公馨

青藍や濁りなき世の十二月
冬はじめそつぽな方をみやりたる
キヤッチボールの望月と水飴と
本丸やかからりと晴れて雁わたし
めでたしめでたし降り始めたる鬼あらひ

鬼あらひ 大晦日に降る雨

久保東海司

風鈴の疎ましき夜のありにけり
この列を掘れと命じて甘藷掘り
月を待つ水にやすらふ鯉の数
去年の水今年の水と川に捨て
人形の菊の裳もぎその滴れる

柳川 晋

陰陽師秘伝印契懐手
神立や切符手配な大国屋
本町の花屋に入る翁の忌
丑紅を買って馬齢を蹴り飛ばす
地には平和をアラビアに神無月を

熊川暁子

あかときの冬立つ音に目覚めけり
人影を入れてやはらぐ枯野かな
蓮の実の穴の空白日がいやす
狐火や見て見ぬふりは怖きこと
押入れに深入りしたる冬支度

寺田すず子

銀杏黄葉ひかりを乗せて舞ひにけり
綿虫や胸の高さに漂ひぬ
僥倖を待てといふなり星月夜
月下かな花柵のこぼれをり
みぞおちや冬の銀河の波立てり

岩下芳子

焼芋の大好きといふひだる神
力抜いて総身の浮ぶ柚子湯かな
掘り起す土黒黒と冬日吸ふ
あかときの空を仰げば息白し
軟骨のぎしぎしといふ冬の膝

近藤紀子

日本海鰯赤く透けてをる
芋掘るや土黒々と匂ひける
秋水に魚影見つけし子らのこゑ
冷やひやと遺愛の肥後守のあり
思ひ出し笑ひよ良夜ひとりゐて

岩月優美子

読み返す手紙に枯葉舞ひにけり
銀杏落葉踏みて詩人の貌となる
黄の花に寄り添ひ舞へり冬の蝶
木枯や神話の森へ迷ひ込む
老いてなほ大き夢追ふ尾白鷺

竹中一花

紅葉狩右京の山のさやさやと
立冬の能勢路なりけり星の宮
子を祝ぎし生田の杜に雁渡し
古書市の立ちて紅葉の百万遍
学園祭教授は酒とたこ焼と

槐市集

江島照美

諍ひや口を割りたる石榴食む
再会の時の過ぎ行き月の夜
一箱の酢橘重たき満中陰
童心で遊具楽しみ秋麗
眼差しにやさしさ宿る牝鹿かな

岡田桃子

翁の碑師の碑ふるふる銀杏黄葉
雪吊りの支柱ユニボの立たせたり
八木節に始まる上州学園祭
「ミッ入り」の文字に誘はれ林檎狩
獅子柚子を抱へてみたり女客

久保夢女

顔上げて勝利宣言秋あかね
頬染めし思ひ北風さらひけり
渋柿もまた定めなり鈴生りに
呪縛解くアダブカタブラ冬ぬくし
大愚とはどんな愚なるや小豆煮る

後藤マツエ

ねんねこで育ちておんぶ知らぬ嫁
人に酔ひホームでころぶ夕時雨
着ぶくれて物の怪の入る宝飾店
凧に負けずと買ひし赤コート
焼き肉の匂ひ闊歩す交差点



阪倉孝子

頭陀袋へ知恵いただきて小六月
神渡し北斎の波しぶきけり
立冬や胃カメラの胃はさくら色
黄落の真只中に誰を待つ
鍋奉行木端微塵の大きくさめ

柴田靖子

いずこから楽の音聴ゆ神送り
枯野中望郷すてがたき今を
目に見へぬ底力ひめ冬田かな
水面のかげ残せし川の水涸るる
木枯や時の準備と背おされ

杉原ツタ子

石室は蛇塚なりし秋の天
しぐるるや蚕の社杜の黙
音ありて尋ねる子らの秋日和
精神の芸の板碑や初しぐれ
産土や三界霊の冬帽子

高野昌代

若沖の拵げし錦秋格てう天井
秋立つや再び開く京「丸善」
蕪村墓に響く添水の裏の山
星月夜だらりだらりの豆のさや
郵貯株その値の決まる十三夜

田中信行

蟹みそを混ぜて極楽甲羅酒
秋澄めりメヌエツト聴くティータイム
小鳥来てバイオリン弾く翁かな
熱爛悼やトリコロールに献杯す
また一つ昭和が逝きて寒椿

谷岡尚美

秋野悼行く高倉健の遙かなり
落葉道懸命に掃く古老かな
校倉や粉雪舞うてきたりける
バス五分鯛焼膝の上にある
大根下す土鍋ふつつ吹き上る

槐集

高橋将夫選

天高し笑ひ弾けてなほ高し
竹原 久保 夢女

ジャンケンゲー十一月を握り込む

闇汁や此の世のものを食べけり

正解の無き問ひばかり冬晴るる

破芭蕉こころ此の身の置きどころ

山霊の光を溜めて冬日出づ
岡崎 犬塚李里子

冬薔薇色濃く何かを待つこころ

更けてなほ灯るあの窓一葉忌

侘助や空は哀しきまでに澄み

宙よりの伝言を聞く冬オリオン

いくつかは微笑みながら木の葉散る
大阪 有松 洋子

家内の薄暗がりより冬来る

我がこころ光度を上げよ冬に入る

友の忌の千代さん今日は小春です

いまでこそ海鼠なれども元は星

妙葉のありやなしやと神の旅
大阪 江島 照美

飛鳥川色無き風の影の色

新蕎麦や一家言ある人ばかり

天高し風車大空かき回す

古文書も三面記事に冬ぬくし

冬蝶の日溜りにみて身じろがず
岡崎 吉田 順子

暁天にひろがる茜鶴来たる

桐の実の鳴るは真白き夢の中

落葉掃くこの楽しみも余生かな

茫々とまた寂々と枯木山

いきしもの皆輪廻とす冬初め
柴田 靖子

槌の音冬の空気を裂きすぐる

ふりむかず前へまえへと大枯野

草も木も装ひかへて神迎へ

月も星もとどまらぬなり冬さるる

銀河往来 高橋将夫

◇『槐集』鑑賞

破芭蕉ころ此の身の置きどころ 久保 夢女

心と体の置きどころが破芭蕉とは、もはや人生を達観した悟りの心境のようでもあるが、親の他界や自身の手術などが続いた時の実感なのであろう。そんな作者は一方で「天高し笑ひ弾けてなほ高し」と詠んでいる。この大らかな詠みっぷりこそ彼女本来の姿と思う。(ジャンケンゲー十一月を握り込む)の句では、その自由奔放な発想に脱帽。〈鬮汁や此の世のものを食べけり〉の句、どうやらこの鬮汁には彼の世のものまで入っているらしい。〈正解の無き問ひばかり冬晴るる〉の句、世の中は方程式で解けないことばかりだと納得させられる。以上、一連の句に読者は楽しさと元気をもらえたことと思う。

山霊の光を溜めて冬日出づ 犬塚李里子

日の出の景をわが身に引きつけ、自らの心で詠んでいる。句姿のよい精神の風景。
〈冬薔薇色濃く何かを待つところ〉の「冬薔薇の待つところ」や〈更けてなほ灯るあの窓一葉忘〉の「一葉忘の窓の灯」や〈托助や空は哀しきまでに澄み〉の「哀しきまでに澄み」の抒情もまた作者ならではの精神の風景。

いくつかは微笑みながら木の葉散る 有松 洋子

微笑みながら散る木の葉を、たくさんの枯葉の中に見つけた作者の眼力というか、感性が素晴らしい。

〈家内の薄暗がりより冬来る〉の句では、北窓を塞ぎ暗くなる立冬の景が巧に表現されている。〈いまでこそ海鼠なれども元は星〉はユーモラスな一句。前世があるかどうかはともかく、海鼠が星だったという発想の飛躍と断定には敬意を表したい。

妙薬のありやなしやと神の旅 江島 照美

病気の悩みはどうやら神にもあるらしい。まさか恋煩いではなからうが。〈飛鳥川色無き風の影の色〉の句では飛鳥川の秋風がリズムカルに表現されている。「色なき風」に影があつて、その影に色があるという。尋常ではない。

桐の実の鳴るは真白き夢の中 吉田 順子

真つ白な夢の中で、桐の実が鳴る音だけが聞こえているという。「白な夢」は作者の精神の位相ではないか、〈落葉掃くこの楽しみも余生かな〉の句を見て、ふとそんな風に思った。

草も木も装ひかへて神迎へ 柴田 靖子

秋になると野山は紅葉して装う。なるほど、それは神を迎える準備でもあったのだ。

〈月も星もどまらぬなり冬さるる〉の句、月や星の運行は止むことがないが、冬には全てが止まったような荒寥とした冬が来る。それが自然の摂理。

新海苔の艶益す黒に和紙の帯 山根 征子

新海苔に巻いた和紙の白い帯。新海苔の黒艶が鮮やかに目に浮かぶ。

〈以下略〉